

コメント

広田照幸（日本大学）

社会学的な視点やアプローチで、カリキュラムに関する考察をどう深められるのか？

〔論点〕 それぞれの分析と規範との関係が気になった。カリキュラムというのは、常に、「良い教育／よくない教育」という価値判断や評価（＝規範的判断）と関わっている。そうであるとなると、カリキュラムの社会学は、「良い教育／よくない教育」という価値判断とどう付き合うのか？

（1）澤田報告について：自覚した決断主義的価値選択？

N.フレーザーの正義論における「承認の政治」「再配分の政治」「代表の政治」に着目して、それをあるべき「未来のカリキュラム」の3つの要素に読み換えていく、インクルージョン、コンピテンシー、デモクラシー

⇒それを体現した学校の事例として、Mission Hill School を紹介している

しかし、ここでも疑問が2つ湧いてくる。

疑問①N.フレーザーの正義論にコミットしない別の「良い教育」を構想する人たちに対して、どういうふうに自分の立場の優位を主張するのか？

疑問②インクルージョン、コンピテンシー、デモクラシーの3つの要素はあればいいのか？ 日本の小学校も3つの要素は重視されてきているだろう。

（2）渡邊報告について：しらないうちに価値選択？

「カリキュラムの社会学」は土着性（ローカリティ）とどう向き合うのか

比較研究の可能性から、更にそれを超えようとするモデルまで提示する意欲的報告
デュルケームの視点を借用

「知識と思考法は社会により与えられる」⇒「学校は知識のみならず、当該社会の思考法とその表現法を教えている」＝説得力があるし、興味深い。具体的な分析も説得的。
しかし、分析が成功しているからこそ、2つの疑問が湧いてくる。

疑問①各社会は、それぞれの教育のあり方から抜け出せないのでは（宿命論）？

疑問②転移・輸出入をどう考えるか

その場合、他のやり方を導入する必要性をどう説明するのか？

（3）山本報告について：こっそり価値選択？

子どもの側の「主体」に応答を迫る空白を残した知識という考え方は興味深い。

疑問①「生きていることば・知識」が「よい」と論じられているような感じがある。

「生きていることば・知識」は本当によいのか？

疑問②そもそも、化石に見える知識は本当に「化石」なのか？

疑問③むしろ、内容の評価に関しては、こっそりとリベラルに肩入れしてはいないか？

（4）3人に共通して尋ねたい

それぞれご自分の報告の立場からみて、日本の今のカリキュラム改革をどう考えるか。
特に、学習指導要領改訂の中で強調された「主体的・対話的で深い学び」をどうみる？